

・・・縄文のタイムカプセル・・・

スポット展示「デーノタメ遺跡が語るもの」

北本市教育委員会文化財保護課 平成 29 年 7 月 6 日発行



図1 デーノタメ遺跡の航空写真と集落の展開

1 台地上の集落は「関東最大級の環状集落」だった!!

デーノタメ遺跡は平成 12 年度から平成 21 年度までに 4 回の発掘調査が行われています。このうち、第 1 次～第 3 次調査は台地上の道路予定地を調査し、第 4 次調査は台地下の低湿地を対象としたものでした。

台地上の調査では、今から縄文時代中期（約 5,000 年前の勝坂式・加曾利 E I 式期）の集落が確認され、おびただしい数の住居跡が出土したのです。このため、かなり大規模な集落跡が存在するものと予想されたため、文化庁の指導によって、平成 28 年 2 月～3 月にかけて遺跡の内容確認調査を実施することにしました。

内容確認調査というのは、住居跡の分布状況を明らかにするもので、集落の規模と構造を明らかにするのが目的です。このため、調査は赤土の上



図2 中期集落の内容確認調査

面まで掘り下げ、住居跡そのものは掘らずに保存します。発掘をすると調査のデータは積み上がりますが、結果として遺跡を破壊してしまうためです。

調査は厳寒から春先にかけて実施しました。その結果、集落の範囲は楕円形に広がり、長径で210m、短径では140mと大変規模が大きいことがわかりました。これは「関東最大級」といってよい規模です。また、集落の中央部には住居跡が確認されないため、ムラの中央部を広場とし、居住域がいわばドーナツを細長くしたような「環状集落」であることもわかったのです（図1）。



図3 出土した縄文土器

2 低地を囲む後期の集落も確認－1、200年間営まれた集落!!－

デーノタメ遺跡の特徴は縄文時代中期だけではなく、後期（約4,000年前）の時期まで集落が継続していることです。後期集落の存在は、「遺跡の東側にありそうだ」ということはわかっていたのですが、やはり規模や構造はわかっていませんでした。

そこで、平成28年6月～7月に後期エリアの調査を引き続き行ったのです。その結果、後期の集落は台地を湾入する低地を囲むように、広がっていることがわかってきました。住居跡の大半は後期前葉の堀之内式期（4,000年前）の時期です。そして、興味深いのはこの集落の西側にも後期中葉の加曽利B1式期（約3,800年前）の集落が伸びていて、まさに弧を描くように細長く展開している様子が明らかとなったのです（図1）。

そうすると、デーノタメ遺跡は縄文時代中期から後期にかけて、約1,200年間にわたって集落が継続していることになります。このことは縄文時代が高度な定住生活を形成していたことを示す重要な証拠であると評価されるのです（明治大学文学部 阿部芳郎教授）。

デーノタメ遺跡は、遺跡として優れている点が多くあるのですが、そのいくつかを列挙すると以下になるでしょう。

- ① 縄文時代中期の集落が大規模な「環状集落」であること。
- ② 縄文時代後期の集落が大規模な弧状集落であること。
- ③ 縄文時代中・後期の集落全体が良好に保存されていること。
- ④ 遺跡を覆う雑木林が、縄文時代の文化的景観をよく残していること。



図4 雑木林に覆われたデーノタメ遺跡